

3月12日 JAたかさき本店にて、オクラ栽培講習会を開催いたしました。  
関係者を含め20名が参加し基礎知識やオクラの要素欠乏症・過剰障害等について講習しました。

### 講習内容

#### 1) 栽培の基礎

【講師：西部農業事務所 普及指導課】

- 栽培のポイント
- 収穫
- 追肥
- 草勢管理
- 摘葉
- 乾燥対策
- 主な病害虫
- 主な生理障害

#### 2) 肥料・農薬について

【講師：JA全農ぐんま 肥料農薬課】

- オクラ病害虫防除薬剤
- 長期栽培に効果のある肥料の紹介

### 講習の様子



# オクラの栽培について

## ○ 栽培暦



## ○ 生理・生態

- ・高温性の作物。適温は、昼温25～30℃、夜温20～23℃。地温の適温は20～25℃。最低気温10℃以下では生育が止まり、落果も多くなる。
- ・発芽適温は25～30℃で、発芽には十分な地温が必要となる。

## ○ 栽培のポイント

- ・収穫期間が長期にわたるため、基肥には緩効性肥料を用いる(窒素成分は基肥で8kg/10a)。
  - ⇒ 基肥が多いと草勢が強くなりすぎるので注意する。
  - 収穫期以降は追肥で補っていく(窒素成分で2～3kg/10aを3～4回)。
- ・未熟堆肥を施用するとタネバエなどの害虫が発生するので注意する。
  - ⇒ 堆肥を入れる場合はマルチを張る1ヶ月前におこなう(2～3t/10a)。
- ・直根性で吸肥力が強いので、できる限り深耕を行う。
- ・発芽揃え及び初期の苗立枯病対策として、無理な早まきはさげ、適湿時にマルチを張って地温を高めておくとともに、は種後にトンネル被覆やべたがけなどを行う。
  - ⇒ 5月10日以前の播種では必ず被覆をする。
- ・センチュウには非常に弱く、また、半身萎凋病、苗立枯病対策も含め、連作を避け、葉菜類やイネ科作物との輪作を行う。

## ○ 収穫

- ・開花後7月開花で4～5日、8月開花では3～4日で収穫となる。
- ・最盛期には1日で3cmほど伸びるので、朝夕の2回収穫が必要となる。
- ・収穫が遅れると莢が硬くなり、収穫後2～3日で黄化してしまう。
- ・品質を落とさないよう、できるだけ若穫りする。

## ○ 追肥

- ・草勢を見ながら1回当たり窒素成分で2～3kg/10aを通路に施用する(NK17化成であれば)

10～15kg/10a)。

- ・ 8月に入ったら追肥の補助として葉面散布も併用すると効果的である（日中は散布しない）。
- ・ 極めて乾燥する場合は通路にかん水を行う（土壌病害が発生している場合は行わない）。

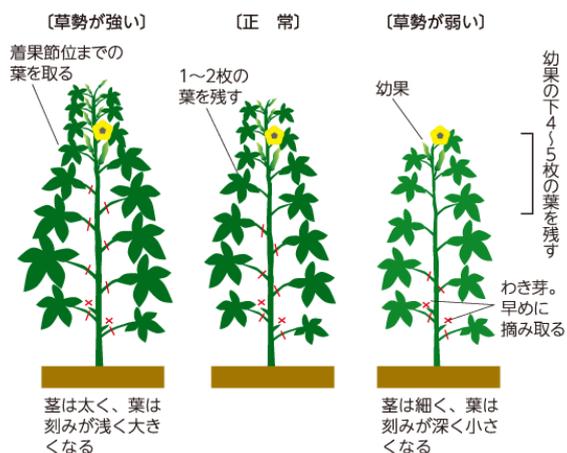
### ○草勢管理

- ・ 8月に成り疲れが起こるため、草勢が低下しないよう、7月からの準備が必要となる。
- ・ 開花節から生長点までに、3枚の展開葉が確保されていることが、良好な生育の目安である。

	草勢が弱過ぎる	草勢が強過ぎる
葉	葉が小さく硬い／葉色が淡い	葉の切り込みが浅くなる ／葉柄が長い 上位置の葉が大きい
莖	細い／節間が短い	太い／節間が長い
莢	いぼ果が発生／硬く果色が淡い	いぼ果が発生／曲がり果が発生
対策	追肥とかん水で草勢回復を図る。 収穫が遅れないようやや若莢を収穫する。	収穫莢のすぐ下まで強めに葉かきを行う。

図 草勢判断と摘葉

摘葉は収穫莢の下1～2枚の葉を残し、それより下を取り除きます。摘葉をすることで通気性がよくなり、病害虫の発生予防や収穫時の作業性の向上が図られる。



### ○摘葉

- ・ 収穫莢の下3～4枚を残し、それより下を摘葉するようにする。
- ・ 草勢が強い場合には、もう収穫莢下まで摘葉し草勢の安定を図る。
- ・ 8月中旬以降は摘葉しない。
- ・ 生育中期から主枝の下部から発生してくる側枝は収穫作業に支障がなければ放任とする。

### ○乾燥対策

- ・ 乾燥が続くと、追肥の効果が出にくくなる。通路に敷きわらをして、ほ場の乾燥防止を図る。

## ○主な病害虫

### (1) カメムシ類

- ・7月下旬頃から発生が多くなり、成虫・幼虫が莢果や蕾を吸汁加害する。

### (2) オオタバコガ

- ・ふ化後、若齢幼虫の段階で莢果、花、莖の内部へ侵入したり葉を食害する。ほ場をよく回り、若齢幼虫期に捕殺する。
- ・被害部周辺には虫糞が散乱しているので、これを幼虫発見の手がかりとし、生育中に薬剤散布する。
- ・7月上旬に予防散布を行い、以降発生程度に応じた防除を実施する。

### (3) メイガ類

- ・ワタノメイガは葉を食害する。葉にくるまって、中に糸を張る。
- ・フキノメイガは莖に潜り込み内部を食害する。被害にあったオクラは萎れる。

### (4) 半身萎凋病

- ・下葉から枯れ上がり、激しく落葉する。莖や葉柄の維管束が黒褐変する。
- ・草丈が30cm位になってから発生し始め、短期間に枯死することはないが、生育は著しく抑制される。
- ・被害莖葉に形成された菌核によって土壌伝染を行う。発病適温は25℃付近。
- ・病原菌はなす半身萎凋病菌と同じで、なす、トマト、いちご、ふき、うど、きくなどに強い病原性がある。
- ・発病株は早めに除去して、ほ場外に持ち出し、処分する。
- ・連作を避け、排水対策を行う。

## ○主な生理障害

### (1) いぼ果

- ・収穫後期の8月中旬以降に発生が多くなる。
- ・過繁茂、草勢低下、低温、少日照、乾燥の条件で発生する。

### (2) 曲がり果

- ・草勢が強いときに発生が多い。莢果の中の子実の発育不良、カメムシ類の吸汁により発生する。

### (3) アントシアンの発生

- ・莖や葉が赤くなる。赤い色素はアントシアン。
- ・降雨量が多く根が障害を受けたとき、なり疲れで草勢が弱っているときなどに発生する。
- ・ガリバーはアントシアンが発生しやすい。
- ・NK化成等の通路への追肥、葉面散布を継続し、草勢の回復を図る。

## 農薬の適正使用についてもう一度確認を!!!

- ・農薬は必ずラベルに記載された使用方法・注意事項を遵守し、飛散防止にも努める。